思春期女子登校拒否の治療事例（2）

――母親面接――

生田　純子

I　はじめに

筆者は本大学紀要9号に思春期登校拒否治療事例を掲載した。この事例は思春期登校拒否の本人の来談が得られたことで、問題の核心に触れることもできたし、終結後にも情報が得られたので、治療者の理解や反省も容易であったといえる。

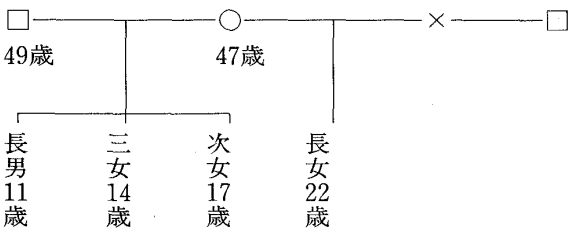
しかし、そこでも述べたように、思春期登校拒否は本人との接触がまことに得られにくいものであり、親への治療が主体となることが多い。親には治療を受けるのが自分であるとの認識がなく、治療関係に入りにくいという問題が生じる。

ここでは、親（主として母親）への治療だけで終わった事例を報告し、母親面接の持つ意義や問題点にも言及したい。

II　事　　例

1）主訴：三女の登校拒否について

2）家族構成



夫――工員

妻――商店自営　C1

長女――店員

次女――高校2年

三女――中学2年　A子

長男――小学校6年

（養父－同年5月　80歳で死亡）

3）三女A子の登校拒否の発症から来談まで：

A子は小学校5年の5月から登校拒否で欠席を始めた。5年生の3学期、県内の養護学校（情緒障害？）へ入る。3月帰宅した際、施設は嫌と拒否して原籍校へ戻るが、やはり2～3日通学したのみで、欠席。6年生は全欠席のまま卒業。

中1の1学期は登校したが、夏休みから調子がおかしくなり、2学期からまた欠席し、中2の2学期に至っている。

小6の2学期ごろ、初潮があったあと〝やせたい〟と食べなくなり、体重が20Kg台となったため、県立病院へ入院する（1ヶ月）。

登校拒否を始めたころ、腹痛を訴えたので病院へ行って検査を受けたり、登校拒否の治療を市民病院でうけたり、教育センターで相談したりした。しかし、いずれも1～2ヶ月でA子が嫌がって止めている。

自宅では家事を手伝ったり、A子の祖父が病気の時には看病したりで、学校へ行かないことを除けば、普通と思われる生活である。

4）来談経路：中学校の担任の紹介で、クライエント（Cl）からの電話申し込みによる。

5）面接の形態：初回面接のみClと夫、あとはClのみ。X年11月16日～X2年2月13日までの1年3か月に16回の面接と、家庭教師1回、

電話2回。その他担任への電話連絡2回である。

1回の面接は60分。方法は来談者中心療法を基本とする。

III　面接の経過

（Clの発言は「」で、治療者の発言は『』で、印象その他は＊で表記）

1　第1期　――戸惑いと混乱――

X年11／16～X1年3／26（1～7回）

インテーク（A子の父と母－Cl）11／16

A子の性格及び対人関係：小学校以来病気以外では欠席はせず、自分のことは自分でやり、手の掛からない子であった。

性格は完全主義。なんでも一番でないと我慢ができなかった。学年が進むにつれて多少成績は落ちたが、それでも3～4の評価であった。

中学校では小学校の5、6年を欠席していたにもかかわらず、成績は上位で、担任も驚いていたという。しかし、A子自身は「我慢して行っていたけど、限界だから…」といっているという。

友人は少なく、自分からは作らない。近所に2年くらい年上の女の子がいて、付き合っていたが、その子の命じるままに動いていた。現在その子は転居して近所にはいない。

中学校では、髪が長くて注意されたことはあるが、それが欠席の理由ではない、とA子は言っている。しかし、本当の理由は言わない。

家族の状況：Clは孤児であり、子供のない養父母に育てられた。Clの夫は婿養子である。長女の父親はClの最初の夫であるが、離婚して、長女が3歳の時現在の夫と再婚している。

長女も中学校時代に登校拒否をした。養父が駆け回って相談に行った。中2の中頃から欠席し、やっと卒業させてもらった。その後専門学校へ通ったが、直ぐ止めたりして、長続きしなかった。それでも犬の美容師の資格を取って、7月から就職した。しかし、11月に入るともう休みだしている。

次女には問題はなく、公立の高校へ喜んで通っている。性格は頑固であり、芯はきつい。長男は次女に似ており、問題はない。

養父は、孤児となったClを近所の人のつてでもらい育てるといった、面倒見のよい人である。現住所で、商店を始めたころ、隣家の主人が急死し、その妻が3人の子供を抱えて苦労しているのを見かねて、自分の家でその主婦を働かせ、自分の子供のようにその3人の子供を育てたりした。その隣家の主婦は6年前に死亡するまで、家族とも従業員とも思える生活を続けた。

養母は6年前に死亡した。そのあと、養父はClからA子を奪うようにして（Clの夫が強調）育てた。長男はまだ幼く、手がかかるので、面倒であったらしい。そのため、A子は祖父を慕い、祖父に甘えて成長した。

養父からはClも夫も「子供の面倒をよう見ない、おまえらは子供を産んだだけの親で、失格だ。」と文句を言われどうしであった。夫は長女にはやや冷たいところがあり、Clも別れた夫と、似た性格の長女に違和感がある。そのためか、長女は家業も全く手伝わず、ぶらぶらして定職にもつけないで、何事も長続きしない。夫とはよく言い争いをし、夫もやり返している。

A子は祖父や父母の期待を一身に受けて、成長した。小さいときから、几帳面で、努力家であり、甘えたり、わがままを言わないよい子で、成績も姉たちに比べてよかったので、祖父は「この子は大学へ入れよう」と言っていた。

登校拒否について、A子は「お母さんがもっとしっかり押し出してくれたらよかったのに」とClのせいにしている。

A子は祖父が死亡した時に、祖父の兄弟から、登校拒否について説教されていた。Clはかわいそうだとは思ったが、とくにかばったりはしなかった。

夫は一ヵ月くらい前に交通事故に会い、入院した。現在は休職中。長男も車に同乗していて、怪我をしたが、腕を吊っていても登校を続けたがった。A子は父親が入院しているとき、母親に添い寝を要求し、それは退院した現在も続いている。ClはA子が夫婦生活の邪魔をすると感じており、むしろ夫のほうが、「甘えなかった子だから、寝てやれ」と受け入れている。

筆者（Th）が『治療が長続きしなかった理由

はなんでしょうか』と尋ねると、Clから「A子がいつも2～3回はお義理のように通うが、すぐ何だかんだと理由をつけて止めてしまった。」と言い、病院などでは「本人が来なければ仕方がないと言われて、親だけ通うことはしなかった。」と弁解する。Thは、本人が来なくても治療をすること、A子だけでなく姉にも登校拒否があったということなので、この際、家のしつけやこれからの事について相談しましょう、と話し、方法、時間、料金について説明した。

夫から「わしも来るのですか。今日は休職中なので来ましたが」との発言があり、Clの持つ問題が大きいように思われたので、特別のことがなければ、Clだけでよいと話す。

＊この回、Clよりもむしろ夫のほうが熱心に聞き、うなずいていたのが印象的であった。

Clは地味な服装で、白髪まじりのかみの毛をおかっぱのように切り、前がみをピンで止めていた。年齢に比べて子供っぽい印象。夫は大柄で、細かいことはどうでもよい、といった話し方で、常々Clのやりかたに注文をつけたことがないという。Clが話すことをためらっていた前夫のことも、夫の方から話し出していた。特にA子を養父が自分から奪ったように感じていると、Thには受け取れる話し方であった。A子の面倒をみてくれていた養父が死んで、ガタガタしていた家の中が落ち着いてみると、A子の問題は何一つ解決されていない上に、親として何をどうしたらよいのかさっぱり分らない、という現状が認識できた、ということであった。

家庭教師についている、ということなので、Thも『一度会いたい。』と言うと、今度の時に話してみる、と承知してくれた。

第2回　（家庭教師）X年11／24

（＊G大の3年生という、色白で、きゃしゃな体格の女性）

X年5月から週1回2時間の予定で家庭を訪問している。大学のアルバイト斡旋の係を通じている。

A子は宿題を出してもあまり積極的には勉強をしないので、週1日程度の勉強では学力補充にはならないように思われる。英語は現在の学校の進度より少し遅れているが、数学はほとんど同じ。他の教科はやっていないので、学校で使っている問題集をやるようにすすめている。

A子の親子関係をみて：母親（Cl）がA子のいるところで、「誰か里子にもらって育てて学校へやってくれる人はないでしょうか」と話されたので驚いた。意外にもA子は平気な顔をしていたが。

また、アメリカ人の養子になって、アメリカで暮らさせたい、どうでしょうとも言われた。そんなこと不可能なのにと、不思議に思った。

最初、家庭教師をつけることをA子が嫌がったらしく、弟かA子の勉強を見てもらいたいということだった。行ってみたら、まずA子からということで1回やったら、2回目からはA子ばかりになった。「弟さんのほうは？」と聞くと、「いいです」ということで、A子専任となった。

登校拒否について：初めは知らされていなかったが、何回目かに「先生ちょっと」とA子のいないところで登校拒否をしていることを聞かされて驚いた。自分が前に行ったところの子も登校拒否で、妙にハッスルして宿題を出したり、励ましたり、「大丈夫もう学校へ行ける」などとハッパをかけたら、3回目で首になった。

A子には相手のペースに合わせてのんびりやろうと決めた。進度もA子に決めさせて、宿題も厳密にはせず、登校したかどうかも確かめないようにした。それが良かったのか、いまも続いている。勉強を嫌がることはない。

『A子は自己決定ができないので、あまり負担になるような意思決定をせまると、また首になるかもしれないですよ。』と注意すると同時に、例え家庭教師が嫌でもそれが言えないということも考えられるし、『母親に対する甘えを、貴方に対する反抗や勉強の拒否という形でだすかも知れません。』と話す。

＊家庭教師との接触が、こんなに早く実現するとは思わなかった。しかし、彼女との話し合いは、本当に有意義であった。

Clが家庭教師に対してほとんど一方的に、「相談に行ってきて下さい」と言ったという

事や、ClがA子を養子や里子に出してそこから学校へやってもらいたいと言っていたりする事は、A子の問題を自分たちで解決しようとしないで、だれかに直してもらいたい、という依存的な態度の現れであると思われた。ClにはA子の問題を自分の問題として把握できていないことが分かった。

第3回　Clのみ（以下全て）　11／30

A子は中学1年の1学期に登校したとき、近寄ってくれる子はいなかったという。「1学期はがまんしていた」と本人が言うように寂しい毎日だったと思う。学校側の配慮があってすこしでも仲間に入れるような事でもあればまた別だったろうが。現在あの中学へは戻る気は全くない。いまでは何組であったかも、担任の顔も知らない。施設に入ったのは祖父が探してきて、ぜひ直せ、ということで、A子も納得して入ったのだが、長続きしなかった。

やせ症になったのは、初潮があってすぐ、と思う。姉にくらべてもやせていると思ったので、そんなに気にしているとは思ってもいなかった。始めは食べたいものも我慢して、自分でカロリー計算しているみたいだった。だんだん胃袋が小さくなって、終わりには食欲もなくなって、よくゴロゴロしていた。入院した頃はあばら骨が突出して、骨と皮になって、手足が冷たく、顔色も悪く、気味が悪いくらいだった。入院中A子は1週間に1回くらいの心理治療を受けていたと思う。

A子の登校拒否には養父が本当に心配していた。入院の前くらいから、「女の子でどうせお嫁に行くのだから、少し早めに養女に出して、そこから学校へ行ったら」と提案していた。テレビでアメリカの子のない夫婦が日本人の養子を欲しがっていると聞けば、「外国へやってはどうか、気も晴れるし」と言ったりした。Clとしては遊びに行ったり、勉強に行くならともかく、養子にやったのでは帰れなくなるからと、内心は反対だった。A子はノーコメントだった。養父は毎朝早く起きて新聞を隅から隅まで読む人で、読ませたい記事をチェックしては「読みなさい」と強要した。夫にも読ませたいものがあると、Clを通じて要求した。夫は「いい加減にしとけ」と相手にしないこともよくあった。Clはそうした夫と養父との間で苦労した。

Clとしては「やれないことは仕方ない」と居直った面もあるが、絶えず養父母から「なってない」と叱られていた。子供たちからみて、自分の親がその親から叱られているのを見るのはどんな感じがするでしょうか。

前の夫は知人の紹介であったが、本当に怠け者で、働かなかった。養父も嫌ったがClも嫌で、長女が生れて1年で離婚した。

今の夫は同じ宗教（神道）で結ばれた。Clが養父から叱られるのをかばってくれなくとも、Clを理解してくれていたと思う。夫からは文句は言われなかった。

＊話し方はゆっくりであるが、特にくどくもなく、淡々とした表現である。養父のことはあまり積極的には語ろうとしないので、もっと奥があるような気がした。

やせ症のことはその当時誰からも説明されていないようで、単なる体の病気といったレベルの理解に止まっている。ClにとってA子は自分の子供でないような存在ではなかったかと推測される。

『A子を養子にやるということについて、あなたの気持ちはどうでしたか』と尋ねると初めて、「内心は反対だった」という答えである。絶対の権力を持つ養父に対して、自分の子供を養子にやりたくないということすら言えない、Clの弱い立場が見えてきた。

第4回　Cl　12／7

夫は年内は休養である。今の仕事は肉体労働なので、肋骨が折れた体では働けない。

2～3年前に長年勤めた会社を止めた。それも少々欠勤が続いたのを社長さんに注意されたら、短気なので、「止めます」と言ってしまったためである。現職は個人の経営で給料もあまり良くない。店の方もたいした収入ではない。A子は学校へ行きたい気もあるが、どこなら行けるとは決められない。自分自身「どこか養子に行こうかしら」と言ったりする。

中学校から秋の音楽祭の合唱のテープを、担

任の先生が持ってきてくださった。聞いてみると、クラスの子の挨拶が入っていた。「私達２年ＯＯ組は40何人ですが、男子のＯＯさんと女子のＡ子さんが欠席です。みんな心を一つにして歌います」とあった。それを聞いてＡ子は名前を皆の前で言われたことに少々こだわっている。

夫は長女とうまくいっていない。長女がうまくいかないのは、家族全員とであるが。先日もものすごい口喧嘩の果てに、長女が逃げ出したら、夫が追い掛けていった。いまにも取っ組み合になりそうだった。長女が何もせず、ブラブラしているのに、ごはんは一人前食べると、夫は目の敵にしている。長女の方も養父に夫の悪口をたっぷり聞かされているせいか、「出ていけばいい」「いらない」など夫の気に入らないことを言う。夫は「おれはどうせあてにされていない」とか「子供３人連れて家を出てやる」などと、Clにぐちる。

たしかに夫はその父親や弟に似て、なまけぐせがついていて、あまりあてにできる人ではない。養父は嫌っていた。そして、Clに「お前がしっかりして、駄目な父親のぶんも子供に教育せねばいけない」とも言ったが、Clに出来ることではない。

夫もClも駄目だと養父は長女やＡ子に口癖のように言っていた。Ａ子は最近「お祖父さんはよくお母さんの悪口を言っていた。自分の娘なのに、よくあんなことを言う、と悩んだ。」と話してくれた。Thは『お祖父さんは立派な人だけに、普通の人のお父さんやあなたが気に入らなかったのでしょうね。』『子供たちの手前、親を立てることもしてもらえなかったのはつらかったですね。』と伝えた。夫が養父に信用されなかったのは仕方がない。一旦休み始めるとズルズルと休むくせがある。夫の弟も一時１年くらいも仕事につかず、よく夫のところにお金の無心に来た。それを養父は断われと言うが、Clにはできなかった。夫は別に悪い事をしているという気はなく、困っていれば助けてあげるのが当り前のように言うので、間に入って苦労した。

＊この回は夫の事が中心であった。自動車事故で、肋骨骨折という重傷を負って、最初の時はギブスをはめた体であった。そのときも長女とうまくいかないのは、「やはり本当の親子でないから」と、他の三人の子とは態度が違っていることを認めていた。むしろ、養父が長女に触らせないようにしていて、口を挟む余地がなかったので、ますますいがみあう関係となったものであろう。

第５回　Ｘ１年１／18

正月には、長男と夫は夫の在所へ行ったが、Ａ子は行かなかった。お盆にも行かなかった。身内だし、欠席のことは皆知っているのに。

学校からは12月に担任が訪問してくださったが会えなかった。『担任には会えませんか？』と聞くと、何時だったか、担任が黙ってＡ子が店番をしている時に来られ、Ａ子に「僕が貴方の担任です」と自己紹介されたことがあった。Ａ子は困って、もじもじしていると担任も困って「お母さんはおられますか」と聞かれたので、奥へ逃げ込んできた。その時始めて顔を見たと言う。担任は後で、もっとＡ子と話をしてから、お母さんに代わってもらえばよかった、と話された。

12月に雑誌に載っていた外国の子供とペンフレンドになった。イギリスの子らしい。正月に手紙を出したので、今か今かと返事を待っている。文章は自分で書いた。

夫は１月から、勤めに出ている。初めの１週間は疲れて、２日ばかりは寝込んだ。

11月ごろ、Ａ子の頼みで、オーブンレンジを買った。Ａ子の小遣いにClが足してやった。今は、それで出来るお菓子を作っている。12月24日はClの誕生日なので、その時はいちごのショートケーキを作ってくれた。チョコレートの板にお祝いの言葉も書いてあった。おいしかった。本を見ながら上手につくる。自分はあまり食べず、人が食べて喜ぶのがうれしいらしい。

もともとＡ子はじっとしていることが嫌いな子だった。いつも何かやっている。書くか見るか、作るか。養父もちっともじっとしていない子だと言っていた。

小さい時から、ヤンチャも言わず、子供らしさがないとは思っていたが。今も他の子供たちは何やかやと文句を言って手伝ってくれないが、

A子は店番でも頼めば直ぐにやるし、年末の特に忙しい時も、家事を手伝ってくれる。

欠席しはじめた頃のことを「あの頃もっときつく学校へいくように言ってくれたら、こんなに長く休まなくてもよかった」と言っている。でも最初はこんなに休むとは思わなかった。まさかと思ったし、本当に体が悪いと思った。

中1の担任は世話をかけたが、転勤されて今はおられない。2年の担任は滅多に来られない。友達も一人だけ仲の良かった子が同級になっている。一度だけ、家に遊びにきてA子の部屋へ入っている。「このままそっとしておいて、中学校の卒業証書を貰えないでしょうか。長女のときはお祖父さんが奔走してくれたのでよかったけれど、わたしはどうしたらよいか分らない。」

＊学校へ頼んで貰えないか、とも受け取れる発言にみられるように、ClにはA子の登校へのあきらめがあり、登校させようと努力する意欲も失われているように思われた。学校との繋がりがあまりにもないのが、その原因の一つにも感じられたので、Clに断って、学校と今後のことで連絡をとることにした。

この回は、A子の現状がややはっきりしてきた。それと共に、A子に対して親として決断しなければならない場面が現れた。まず、ペンフレンドの件であるが、A子が雑誌を見て選んでおり、Clも認めてやっている。また、オーブンレンジはClが初めて親らしくA子の頼みを受け入れて、買ってやっている。「あまり今まで物をねだったりしない子でしたから」というように、A子も小遣いを出すという条件で、二人の共同購入が実現している。そのオーブンでA子が最初に作った大作が、母へのプレゼントであった。「おいしい」と喜ぶ母を見て、A子も子供としての満足感を味わったものであろう。A子が休み始めた頃に「もっときつく学校へ押し出してほしかった」と母への不満を吐露しているが、押し出すという具体的な手段だけを意味するのではなくもっと親らしく心配して、頑張ってほしかった、という意味に受け取れる。A子の登校拒否は親らしくない親への警鐘なのであるから。

ここで、Thから担任に電話をした。『A子の状態は落ち着いてきたこと、しかし、まだ学校へ出られる状態ではないこと、登校拒否の本当の理由はA子にも親にもまだ十分分かっていないが学校の刺激がないままに時が経ち、A子も登校への意欲が減退してきていること、母親もこのまま努力せずに卒業できないかと考え始めていることなどから、A子の受け入れられるペースで登校刺激を加えてみてほしい』と告げた。担任は快く了解した。

第6回　3／1

ここのところ1週間に1回くらいの割で3回程、担任が来てくださっている。テストを持ってきてくださり、やっておくと、次の時にそれを見て採点されるという具合。2人の先生が見えて、一人は担任、もう一人はH先生で、4月からこういう子のクラスの担任になられるという。担任より少し年上かなと思われる、感じのよい先生。中学校だけでも6～7人も登校拒否がいるという。A子は先生の来訪を特に嫌がる様子はなく、プリントはやってある。

2月に学校で「立志の集い」というのがあって、写真を撮らねばならなくなった。欠席している人は、指定の写真屋で撮れば良いのだが、A子は制服をどうしても着ることができず遂にやめた。「制服を見ると特別のおもいがするのか、わざと見ないようにしているし、嫌と頑固に言い張るし、くどく言うと、写真を撮るくらいなら、死んだほうがまし、とまで言われて、A子の意思の固さが分った」。

文通の相手から返事がきた。A子はすぐに返事を書いて、次には日本らしい写真を送ると約束したらしい。お城の写真を撮ると言いながら、一人では行けないし、日曜日に夫は忙しいし、目的は果たしていない。

A子の友人は一人も来ない。もともと居ないし、休んでいればあっても離れてしまうから。今ではA子の事に気をつけている子は一人もないと思う。だから文通の相手の便りを首を長くして待っている。思えばかわいそう。

「今の中学校へは行けないと思うので、海外の学校はどうでしょう。」と尋ねるので、『外国で

もいいから学校へやりたいというお気持ちは分りますが、いまは学校へ行くことだけを考えるよりも、その前に、A子さんの行けなくなった根本の問題を考えていくほうがよいのでは』と答えた。「そこがよく分らない」というので『人に負けたくない気持ちが、自分の能力以上の結果を求めて、息切れしたのだと思う。現実の自分の姿を素直に受入れることができるようにならなければ、どんな学校へ入っても、また挫折することになるでしょう。』と言って、『A子さんの問題が全部分ったわけではないのですが、A子さんが、学校へ行きさえすれば、またすぐに以前のような成績をとるとか、何でも他の子より出来るといった、励ましかたは取り敢えず止めましょう。』と伝えた。

拒食症の頃は、生きていてくれればと願っていたが、元気になってみると、やはり学校へ行って欲しいし、学校へ行けばA子も成績にこだわるし、難しい。中1の1学期も始めの内は回りも気を使っていたのに、馴れてきてもう大丈夫なのか、と思って油断したのがいけなかったように思う。その頃から、成績の悪いのがはっきりし始めたから。

＊早速学校側からの働き掛けが始まった。Clの懸念にもかかわらずA子は担任の訪問を受入れている。ただ、写真を撮ることには断固として拒否しており、ClもA子がなにを嫌がっているのか理解できるようになった。

A子は友人と呼べる人が一人もいない、というほとんど孤立した子で、それを今まで異常であるとは思っていなかったClのうかつさが表面化した。次女も長男も沢山の友達がいて、実に楽しそうに学校へ行っている。長男はA子に比べれば、成績もぱっとせず、それだけに、養父の期待も薄く、干渉も少なかったと気付くことができた。

ThからA子の問題の一端の説明を聞き、やっと自分の考えの方向転換を計ろうとしはじめた。A子の問題が表面化した〝やせ症〟の頃からのことを思い起こして、どうしてやればよかったのか、それなりにつらい作業が始まった。

第7回　3／26

（春休みなので、Clと一緒に面接に来るものと期待したが、無理であった。）

担任とH先生が〝3年生を送る会〟のビデオを持って来てくださったが、先生方とは一緒に見られない。家庭教師の方と一緒に見た。今日も二人の先生がもう一本のテープを持って来られるというが、多分一緒には無理と思う。

促進学級（H先生の学級のこと）は4月6日から始まる。学校から4月からの名簿について普通学級と促進学級とどちらに在籍したいか決めて欲しいと言われた。

Clとしては促進学級の方がよいと思うのだが、A子は始業式の時、名前が促進学級のほうに載るのが嫌だ、と言っている。そこで、『名前の公表の仕方については、先生方と相談されて、実質の問題を考えた方がよいのでは。』と伝えた。

3月の下旬に京都へ行きたいと、次女と計画している。小学校の修学旅行にも行けなかったかららしい。その当時は京都なんか行きたくない、とわめいていたのに。「本心は行きたくても行けなかったのですね。」

＊4月からの学級の事で、本人のA子は決められないが、Clは自分の意見を持っている。A子が小学校の修学旅行に行けなかったのを、行きたくても行けなかったのだ、とやっと理解する事ができた。

〈第1期の考察〉

インテークの時点で、すでにこのClの持つ問題が、大きいと推測された。養父とClの関係や、養父とA子の関係、また、長女も登校拒否をしていた事などからである。夫は無口なタイプであろうが、Clとの関係も悪くは見えず、ひとまずClとのカウンセリングを契約している。しかし、この時点では、養父とA子の関係はかなり明らかになったとは言うものの、この家における養父の存在感については、まだ把握できていなかった。

孤児であったClにとって「拾われたも同然」という形容で、大恩ある養父の事を説明し、何事も養父の意のままに進めてきたやり方に疑問をさしはさむ余地はClにはないようであった。

第2回で家庭教師から、「自分の子供を養子にしたいとか、アメリカへ里子に出したいと言い出す事や、それを本人の前で平気で言う神経が理解できない」という、まるで自分の子供の事ではないようだったという感想を聞いた。ClのA子に対する感情の現実なのであろう。

第3回でA子のやせ症のことや、養父を巡る家族の問題がやや明らかになってきた。

養父と夫との関係も弱い立場のClにとってつらい場面が多かったことと思われる。しかし、夫は表立って養父と対立して、Clの立場をより危うくするような事まではしていない。むしろClも夫もよく養父母からこき下ろされているという、同じ被害者の立場であったのかもしれない。しかし、これは子供達にとってもつらい関係であったと思われる。

第4回になると、Clの夫に対する評価があまり高くない事が分かる。それも、養父の評価が影響していると考えられる。それにしても、養父が「駄目な父親のぶんまで頑張れ」とClを叱咤激励するうえ、孫に当たるA子や長女にもそれを言うなどとは、自己中心的な暴言である。養父の傍若無人ぶりが明らかとなった。

第5回となると、A子が母親に何を求めてきたかが少しずつClにも理解できるようになってきた。しかし、Clはまだ依存的で、自分では何もできないと思いこみ、このまま卒業させてもらいたい、それを誰に頼んだらよいか分からない、と逃げ腰であった。第6回で学校からの働らき掛けが始まってみると、A子には友達がいないので、今の中学校へは行けないから、外国はどうかなどと、まだ学校へ行くことだけにこだわっていることが明らかになった。

そこで、行けないことの真の意味についての話し合いをすることになった。A子のプライドが高すぎることが、問題であり、それが今までのしつけによって形づくられたことであると分かっても、今度はどうすればよいのか分からないというのが現実であった。

第7回では、A子の小学校の修学旅行のときを思い出して、A子の本心が分かりかけてきた。もう「お祖父さんでなければA子のことは分からない」というのではなくなったのである。

2　第2期　――A子と共に苦しむC1――

X1年4／19～10／18（8～13回）

第8回　4／19

促進学級に決めた。3月の終わりころは、何となく学校へ行けるような気がした。しかし、登校日が迫ってくると駄目な事が分かってきた。6日は長男の入学式で、学校へ行った。その時、促進学級の中に基本と促進と二つあることが分かった。そして、小学校のときの基本学級の担任の人が、促進学級1組の担任となっていた。その人は近所に住むボランティアで、よく知っている人なので、余計にがっかりした。

式の日と、次の日には担任（2年）とH先生の二人で家に見えたが、あとはH先生だけが来てくださる。A子は会えないことはない。一度だけ一緒にビデオを見た。

3／30に次女と京都へ行った。関西に住む夫の従兄弟が来たので、その帰りに京都見物をさせてもらったもの。

養父がなんでもやれる立派な人だったから、自分ら夫婦は全く及ばない。今は「お祖父さんがいたらよかったのに」という気持ちがA子の中にあると思う。「私にもあります。」養父は長女とA子を自分の手元において可愛がってくれた。そこで、Clの悪口やアラをよく言っていたので、二人の子はClを信用しなくなった。たしかに養父の言うことも、もっともではある。夫も養父の気に入らない人だった。夫もそのことはよく知っている。Clからみても夫は決して養父の後をやるような人ではない。能力的にも駄目だし、その自信もないと思う。今一つはっきりしない人で、頼れない。

『養父は立派な人だったかも知れませんが、子供の親であるあなたや、ご主人の悪口を孫に言うということは、ご自分の株を上げることにはなっても、あまり教育的とは言えないように思います』と伝えると、ややあって「そうですね、確かにそうですね」と考え込む。

ペンフレンドから手紙がきた。15歳にしては大きく見える。A子は喜んで自分の写真や京都の土産のハンカチなどを送った。

＊新学年になって少しは期待したがまた駄目に

なったので、ややがっかりした様子である。春休みの旅行や、従兄弟の話から、また養父のことになる。夫が養父のように頼れない、と依存が受け入れられないClの不安がのぞかれる。養父についてのThの気持ちを述べると、黙ってうなずいていた。まだまだ養父の正しい評価にはほど遠いようだ。

第9回　5／17

5月の連休前に1日だけ行った。家庭教師の先生に勧められたのか、どうしようと迷っていたが、昼前に制服を着て手ぶらで出掛けた。車でClが送って行った。H先生と会って1時間くらい話をして、校長先生にも会った。4時限目が始まるとH先生は授業に出られたので、帰ることにして外へ出たら、玄関で3年生の女の子に会ってしまった。その子は武道館から出てきたもので、顔見知りの子だった。逃げようとして玄関へ戻ったら、その子も入ってきた。促進学級の靴箱と3年生の靴箱は同じ場所だったのだ。その子も少しうろうろして出て行った。A子はとても嫌がったが腹を決めて、武道館の前を通って帰った。A子はショックでもう行かないと言っている。

15～17日は修学旅行なので、誘われた。促進の民宿は別になっているということだったが、行く場所が同じならやはり行けないのは無理もない。その3日間は3年生はいないので、学校へ行こうかと言い出した。H先生も賛成してくださったが行けなかった。

A子はホームスティに行く気がある。イングランドは20日で60万円以上かかる。沖縄は近いし安いからそちらにしなさいと言ってある。

＊A子が学校へ行ってみると言い出し、Clもついて行く。しかし、3年生の顔見知りの子に出会って、結果は無残なものなる。「腹を決めて……」のあたりでは、いざとなると決断できるClの姿がうかがわれる。

また、海外へのホームスティの件では沖縄ならよろしいとA子に言う事ができるなど、母親らしい指導性を発揮することが出来た。

第10回　6／28

5月の下旬から夕方少しずつ学校へ行っている。出席カードを作ってもらった。H先生とN先生（担任）と女の先生が迎えてくださる。A子が自分で言い出した訳ではないが、欠席が続くと卒業も心配だったので、Clが勧めた。昼間行くと、知った子に会うので、6時半～7時頃に出掛けた。今は明るいので、7時半ごろにしてもらっている。制服ではなく私服で、今のところ土曜日以外は続いている。A子は喜んで行くとは言えないが、渋々でも黙って支度して出る。3日程前から、オセロをやろうということになった。2日は勝ったが、3日目の昨日はN先生（強いので知られている）だった。もうこれで最後といってやったら負けた。A子は悔しがっている。Clは3人の先生とやればお終いと思っていたが、A子は負けたから止めたと思われるのが嫌だ、という。「始めから3回で止めるつもりだった」と言い訳して、あきらめきれない。『何がなんでも勝ちたい、という負けん気が出たのですね』とA子の気持ちを明確にする。ClはA子は「先生には負けたくなかった。お祖父さんなら仕方がないけど」といっていると言う。

ホームステイは7／21から10日か1週間くらい沖縄へ行くことになった。6／3に説明会があったが、A子は一人では行けず、Clは都合がつかなかったので説明会は止めた。

A子はまだイギリスに未練がある。20日もあるし、無理に止めさせたが、高校もイギリスにしたいとか、ハワイの学校にしたいとか、夢の様なことばかり言う。

『夕方の学校へ行くことは、どなたのアイディアですか』と聞くと、「長女が中3の3学期に夕方に行かせてもらっていた。そこで、私がH先生に提案したところ、賛成してくださり、私がA子に話したものです」という。

＊全体にエネルギッシュな感じで、「お祖父さんならこういうふうにした、というレベルで物ごとを進めている」と述べるなど、模索しながらも、ただ手をつかねているのとは違った雰囲気である。なんとかこの中学校へ行けるようにと、必死の親子の試みが始まった。長女のときの方法をClがH先生に提案している。学校の努力も大きい。

第11回　7／12

学校へは6時半～7時半に毎日出掛けている。喜んでとはいえないが、仕方なしに出ているように思われる。

Clは別室で待っていることにしたが、それをA子は嫌がっている。理由は先生と1対1だと答えなくてはいけないから。A子は先生からアルバムに写真を載せるかどうか聞かれても、返事ができない。A子の気持ちは自分のアルバムだけに自分の写真をはり、他の子には自分の写真を貼りたくない、というもの。そんなことはできないだろうと思うせいか、先生には言えない。

大体上の子たちでも、自分の意思が言えない。恥ずかしいとか言って、周囲に気がねする。

A子も長女も消極的なタイプで、養父が命ずるままに動いていた。今は、命ずる人がいないので、自分で決断しないといけないのに、その力がない。次女は積極的ではないが、人の言うなりになっているようで、その実はかなり自分でやっていける子である。A子は次女を頼っている。

養父は困っている人を放っておけない人で、よく面倒をみた。命の恩人と思っている人もいるはずなのに、今は案外冷たい。段々疎遠になるようで、妙な感じ。亡くなってからは、面倒をみた人達が寄り付かない。どうも養父の面倒のみ方がおかしいのか。

養父が一番期待していたA子が今こんな事になって、養父もがっかりしていた。

＊A子が決断できないことから、Clは他の子供達のことも引き合いに出して、「大体家の子は意思表示ができない」ことに気付き、A子も長女も養父の言いなりだったから、その力が育っていないことに、思い至る。養父に対する絶大の信頼が崩れかける。

第12回　9／13

7／21～29に沖縄へ行ってきた。なんとか無事にこなしてきたらしい。H先生も2・3日して電話をくださった。「出掛けた」と言ったら驚いておられた。

大阪まで送っていった。Clについてきてほしいというので、夫が車を運転し、次女と4人で行った。出発間際まで、不安な様子だった。知らない子がいっぱいだったが、独りの子もいたので、すぐそういう子と友達になって、飛行機に搭乗していった。行った先はアメリカ人の夫婦の家で、N県の子と一緒だった。帰ってきたら、陽に焼けて元気そうだった。行けただけでもよかったと思っている。

8月の末にあった模擬テストで、理科がまったくできなかったので、今は学校では理科をみてもらっている。相変わらず昼間の学校へは行けないという。

＊A子が9日間のホームスティに参加できたので、Clは参加できただけでもうれしいと涙ぐんでいた。A子もすっかり落ちこぼれてしまったかに見えていたのに、親から離れて知らない人と過ごす事ができたのだから。しかし、知っている人の中へは入って行けないのが現実である。これが登校拒否の実態であることを、Clはまだ知らない。

第13回　10／18

2学期からは土曜日も行っている。主として理科だが、木曜日には社会の先生にも教えてもらっている。合計4人の先生が交替で面倒をみてくださる。Clは隣に座っているが、手や口を出す場面はない。

2回目の模擬テストは10／14にあって、それも受けた。つぎのも受けて、その結果で入れる高校へ行きたいという。模擬テストは中学校で、同じ時間帯にやった。別室だったが、1回目は女の子と、2回目は男の子と一緒だった。どちらも学校を休んでいる子なので、平気なのだろうか。登校拒否は3年生では男子2人女子3人、2年生にもいて、全員で10人くらいにもなるという。

模擬テストのとき、希望の高校を書くことになったが、どこを書いてよいか分からず、次女に聞いてS高校にした。理由は近所の子があまり行かないところだからというもの。結果は277（500）点あって、先生もびっくりされた。S高校が希望なら、英語のスピーチ・コンテスト

があるから、それを受けたらと勧められた。それに出て、成績がよければ入れるという事らしい。A子はひるんでいる。

Clとしては高く望んで、その高校でビリになるというより、ランクが下でも中での成績が上位でいた方がいいと思うがどうでしょう。A子は平凡はいや、何か人のやらないことをやりたい、としきりにいうが、養父の影響と思う。いつもそういう事を言ってA子を育ててきたから。『そういう意味では、今の登校拒否も人のあまりやらないことですね。』と受けると、A子は「お母さんのような平凡な主婦にはなりたくない。」とClの生き方には批判的であるという。

養父は他の人から見れば、なんであれだけ頭もよくて、努力もして、大学も出ているのに、こんな田舎で○○屋なんかして終わったのか不思議だ、と言う事です。やはり、口ほどでなかったのか、それとも自分ではできなかったので、孫に夢を持ったのか。

＊思いがけない事から選んだ高校のスピーチコンテストを受けるように勧められて、ClもA子も戸惑っている。

Clは高校の名前よりも、A子が挫折しないでついて行けるところを選びたいと思い、A子にもそう言っている。A子が高望みをするのは、養父がそう教え込んだからと気付く。そして、初めて養父が大学まで出ていながら、こんな田舎の商店主に終わったのは、所詮ただの人だったのか、と目から鱗が落ちた思いがしたのだろう。この回初めて養父に対する批判が出た。

〈第2期の考察〉

この期ではA子の登校への努力が少しずつ実を結ぶ時期である。しかしそれは、A子にもClにも今まで経験しない事ばかりで、辛い時期であった。

第8回では促進学級の事で、やや思惑が外れたのかがっかりする場面もみられたが、何よりも促進学級のH先生の人柄を好ましく感じているだけに、支障はあまり無かった。

養父については、まだ頼りたかったという気持ちもあって、養父からけなされていた夫への評価も、偏っている。依存的なClは依存の対象を求めている段階である。

第9回では、A子と一緒に学校へ行ってみるなど、登校への意欲が、表面化してきた。家庭教師の先生に勧められたからとはいうものの、これまでのA子であったら、いかに引っ張られても動けなかったと思われるので、進歩は大きい。またこの回にThが『授業時間でなくても先生の都合のよい時間に行ってみるのも手です』という助言もしている。

A子のホームステイは渋々ではあったが、Clに受け入れられている。Clも半信半疑で、「行く段になったら、家から出られないということになりそうですが」と言っていた。

第10回になると、いよいよ授業後の登校が始まった。先生とやったオセロの結果で、A子のプライドの高さが浮かび上がる。ClもこれがA子の問題の核心部分だと理解できたようである。そこでClもA子ができもしないことを望む、と批判的になる。また、Clは「お祖父さんならこうしたというレベルで進めている。」と、自ら養父のようでありたいという目標を立てているかのようであった。第11回では、写真の事から、A子が決断したり、意思表示をする事のできにくいことが話され、A子の養育が間違っていたことをはっきりと認めて、その責任の一端が養父にあることに気付いた。第12回ではA子のホームステイの事が喜びを持って話された。Clは学校の同級生に会えないのが不思議でならないと述べ、登校拒否の子供の心理が、いまだに不可解であると言っていた。

第13回では高校を選ぶのに、近所の子が行かないところという選択基準に、A子の寂しい現状が思い起こされて哀れに思えているようだった。A子の問題から、養父の事に話が及ぶと、あんなに尊敬していた養父が、ただの人だったのではないかと気付く。〝落ちた偶像〟とでもいえる養父への評価であった。

3　第3期　――自信の回復と登校への努力――

X1年11／15～X2年2／13（14～17回）

第14回　X1年11／15

学校へは夕方からの登校を続けている。A子

の変化はごくわずかであるが、たずねられれば首を振るとか、社会での答えなどは口に出して言っている。家でも多少勉強するようになった。

S高校のスピーチ・コンテストは一応やってみる気になっている。まだ練習はしていないが、S高校へ行きたいらしい。家庭教師の方にも週2日にしてもらった。スピーチは大勢の人の前でしゃべるのだから、心配している。

最近近所の人とのトラブルで頭が痛い。家は四つ角のところにあって、狭い道路から広い道路に出るところに、店がある。その角のところに10年以上前から自動販売機が立ててある。旗も出ているからそれが見通しを悪くしているとは思うが、自分の土地だし、今までも気にはなってもそのままだった。まだ養父が生きているころ、その自販機に〝邪魔だ〟と言う張り紙がしてあったことがあった。しかし、養父は無視した。ここ2・3日前、裏に住んでいる人が、〝邪魔なのにわざと事故を起こすようにしている〟と言っている人があると、耳にいれてくれた。腹が立ってならない。何年も置いてあっても別段事故もない。後ろへ下げれば、見えにくくなり、売り上げにもさわる。自分の土地だのにと思うのに。夫も同じ意見だ。養父もそうだったが、Clも他人にはサービスしたり、頼まれれば否とはいえず、みすみす損をしてもやってあげたりしているのに、悪口を言われるのでは報われない。「私たちは近所の人の秘密を知っても言わない。悪口などは言って歩かない。それをいいことにして勝手な事を自分ではやっておいて、悪口を言う。まったく住みにくい。」

＊この回はClと近所の人達の関係が中心であった。自動販売機の位置に関して、近所からクレームがつく。自分の土地なのに、と不満を述べながらも下げることを即決し、業者を呼んでいる。養父はクレームを無視したが、自分はそうはしない、というところにClの自立がはっきりと自覚できる。

A子もスピーチ・コンテストに出る決心をする。高校へ入りたい一心であるというが、よく決断できたと思える。Clは母親らしく人前で声をだすことがいかにA子にとって困難かと考えると、心配が先に立っている。

内気なClにしてはよく喋り、自分の問題を自分で解決して行く様子がよく分かる話し方であった。もう養父の陰で、いいなりになっている人ではない、という印象であった。

第15回　12／13

スピーチ・コンテストは1月15日にある。週2日だけH先生（英語の先生）が見てくださっている。課題は高校の方から出されているもの。声を出すのが大変である。今までは会話ですらスムーズに出ないのに。いつもの4人の先生は、馴れてきたので笑い声も出るようになった。この頃では先生方も遠慮のない口を利かれるようになったが、H先生だけは、絶対にA子が気にするような言い方はされない。話し方もじょうずだ。Clは側についている。離れるのをA子が嫌がるので。

10日には校長先生に聞いてもらった。後ほかの先生にも順次聞いてもらうからとH先生は言われる。本番で、果たして人前に出られるかどうか心配している。それと、上がって言葉を忘れてしまわないかと。開き直ってくれればいいが。

A子の日常は、外出する事は独りではできないが、買い物くらいならついて出るし、遊びに行くことができた。12月になって、名古屋へコンサートを聞きに次女と行った。もっとも夜だったからよかったのかもしれない。

＊学校でのA子がだんだん馴れてきて、先生方とも話ができるようになり、特にH先生とは心が通じている。しかし、コンテストは心配である。A子の心が分かるようになっているだけに、不安は隠せない。

第16回　X2年1／17

15日の英語のコンテストには出させてもらった。上がってしまって、声も小さかったし、はっきり後ろまでは聞こえなかった。

出演者
待っている出演者 審 査 員 父 兄

A子は始めから2番目で、落ち着くひまなく順番が来た。H先生は丁度よいところと言われたが、普段より出来がよくなかったので、A子も落ち込んでいた。

H先生はよかったよと言ってくださった。同じ学校の知っている子も出た。その子は声も大きく順番も後の方だった。終わってから、A子はその子と少し話をしていた。

翌日はやはり夜出掛けた。スピーチがうまくなかったので、先生に顔を合わせたくないなどと言っていたが、それでも出掛けられた。模擬テストの4回目も受けた。今度は一人だった。誰にも会わないようにうまくやれた。受ける前は渋っていたが、せっかくだから受けたら、と勧めた。

今3年生は面接の練習をしている。A子も毎日少しずつやっている。〝なぜ登校拒否をしたか〟という質問には理由がうまく言えない。そこでH先生とClが相談して、友達関係が冷たくなった、といった意味のことを思いついた。A子はそのことを言う段になると涙が出る。「本番の時、泣いたらどうしよう」とA子が言うと、先生はそのくらい悲しかったのだ、と思ってもらえるから、泣いても平気と言われた。入試は2月19日くらい。

＊コンテストの様子に加えて、失敗と思いながらも、励まされると翌日学校へ出て行けるA子の進歩をClも認めている。

高校の入試の面接の練習で、登校拒否のことを聞かれたらどう答えるかで、図らずもA子自身が自分の登校拒否と向き合うこととなる。「まさか成績に陰りが出たからとは言えませんし」とClもA子の真の理由が分かってきただけに、そのものずばりを言うのは避けて、当たり障りのないもので、説得力のある理由の「友達関係」にした。しかし、A子には友達と言えるような人はありません、とClは言い、それが問題ですね、と付け加えた。

第17回　X2年2／13

19日の入試は一応受けさせてもらえることになった。その前に2回ほど高校へ面接に行ってきた。それでやっと許可が下りた。Clが車で送って行くだけで、あとは一人でやってきた。最初のときは面接で泣けてきたと言う。込み上げてくるものがあったらしい。

中学へは、1月いっぱいは夜行っていたが、2月からは昼間2時間促進学級の方へ行っている。2月4日以後、一日も休まない。先生もつきっきりとはいかないので、自習もあるし、10時というのは授業中なので、マラソンをしている生徒に出会ったこともあった。はじめ、A子は嫌と顔色を変えたが、2年生だったので、思い切って中を突っきって入っていった。

A子は本心は「中学校へ行きたくて行くのではない、高校へ行きたいから仕方なしに行っているのだ」と言うが、いくら仕方なくても動けるようにはなっている。

H先生とは気持ちがぴったりしているようだ。Clとしてはまだまだと思っていても、先生から「どうだ、やってみんかね」とすすめられると決心がつくようだ。

『入試が19日で、発表が22日ならそれから今後のことを決めたいので、3／5の午前中に電話を掛けてきてください』と告げる。

＊Clは1月頃から、急に大人になったように感じられる。服装から歩き方まで。自信もみられるし、なによりもてきぱきしている。

面接はこの回で終わることになる。入試を受ける許可を得るため、A子は2度も一人で高校へ面接に行かなくてはならなかった。A子にとって大変な試練であった。しかしClもやはり、そのくらいのことができないようだったら、高校も長続きしないと思い、2度目の時は、車で送っていかず、A子一人で行っている。どうやら登校拒否の理由もうまく説明できる。

中学校へも昼間に登校できるようになっていた。H先生の巧みなリードが、A子の決心を促しているのだが、Clとしてはいろいろな困難に出会っても、乗り切っていける力がつ

いてきたという自覚ができてきたので終結とする。

3／5　電話連絡

S高校へ合格した。A子もとても喜んでいる。少し元気が出たようで、卒業式にも出ようとH先生がおっしゃって、A子もその気になりつつある。まだ多少の不安はあるが、様子を見てみようと思う。『4月の下旬頃まで様子をみて、良くても悪くても一度電話をください』

4月下旬　電話連絡

入学式から順調に行っている。中旬にあった合宿にも参加できた。特に気を張っているようでもないし、中学校の時よりずっと安心して見ていられる。

『お元気で、また何か相談したい事が出来たらおいでください』

〈第3期の考察〉

この期になると、Clはためらうことなく自分のやり方を押し進めていくことになる。特に第14回では、近所の付き合いについて、実に生き生きと自分の感情を吐き出している。いろいろ勝手なことをする人がいるらしい。養父もそうだったが、困っている人を見ると放っておけなかったという。それなのに、Clが噂をまいたりしないのをよいことに、言いたい事を言う、と頭から湯気を出し兼ねないような勢いであった。そして、養父は無視したが、「自分はやっぱり妥協する」と決め、実行している。

Clの態度がきっぱりしだしたからであろうか、A子もコンテストの出場を決めている。第15回では、コンテストの練習とはいえ、学校で何人かの先生の前でリハーサルをしている。声が小さい事が難であるが、それもH先生の励ましで少しずつ上達しているが、ClはA子がさぞつらかろうと、胸を痛めている。

いよいよコンテストの様子が、第16回で話された。意外にも顔見知りの子が出場していて、Clの方がはっとするが、A子はあまり動揺しない。その子と後で話ができている。A子の回復はClが思ったより早かったようである。Clはコンテストは失敗だったから、A子は先生に会えないと予想したが、以前のA子ならそうであったろうが、今のA子は違っていた。

模擬テストも受けていよいよ面接の練習となって、A子は自分の登校拒否について否でも発言しなくてはならなくなった。いろいろな思いがよぎるのか、そのときにはいつも涙が出るとClはいう。出来たらその質問はさけてもらいたい、とClは何度も考えたがA子のためには避けられない質問であると、心を鬼にして見守った。

学校へも昼間に出掛けている。H先生の不思議な指導力というか、魅力が、次々にA子に新しい場面へと挑戦させてくれている。A子の努力は続けられ、ついに高校の入試にも成功している。

Ⅳ　考　　察

母親面接では、母親の子供への対応の仕方と母親自身の問題が取り上げられるのが常であるが、このケースの場合養父の問題が、子供へも母親へも大きく関わっているので、母親（Cl）の持つ問題、子供（A子）の持つ問題、養父と家族全体の問題、とに分けて最後に母親面接の意義について触れたい。

1　母親（Cl）の持つ問題

Clは何歳で自分の実父母と死別したかはっきりしないが、実父母の記憶は全くない、とのことであるから、ずいぶん幼少の事であろう。養父母に育てられて決して幸せだったとは言えないように思われる。絶えず恩を売られ、出来が悪いとけなされ、叱られてばかりだったというからである。普通、思春期になると親への反発が始まるが、Clにはそれも許されなかったと思われる。ただひたすら、言うとおりに従ってきたらしい。その代わり養父は何ごとも正しく、世間の人も希に見る奇特な人と評価していたから、頼っていれば良かったのである。

結婚も養父の言うままにして長女を生んだが、夫は怠け者で、養父の気に入らず、離婚させられる。養父は父親のいない長女を不憫がって手元に引きつけて可愛がる。再婚の相手は同じ宗教で知り合ったというが、養父の引き合わせではなかったとみえ養父は最初から気に入らない。

夫と養父の間でClの結婚生活は苦労の連続であった。その間3人の子供を産むが、中でも利発なA子が養父の気に入りまた手元から奪われてしまう結果となる。こうした事情の中では、Clは立派なことをいう養父に頼っていれば良く、なまじ自分の意見などは持たない方がよかった。Clの依存性はClの成長過程で無理に押しつけられたものだった。また、自主性を奪われたClは何ごとも決定しなくてもよかったので、一面では気楽でもあった。二人の子供が登校拒否を起こして、相談や治療に通う事も養父が決定した。Clにとって、長女やA子は自分の子であって自分の子でないという意識であった。思春期を迎えたA子がやせ症になったのも、Clの人形のような立場への抵抗と見られる。この時点で、Clへのカウンセリングが行われていれば、中学校での登校拒否は防ぐことができたかもしれない。

治療の中ではあまり出てこなかったが、養母も決して暖かい人ではなかったように感じられる。養父のしり馬に乗って、Clをけなしたり、叱ったりしていたようであるから。またそういう人でなければ、この養父とは暮らせなかったであろう。

治療の経過と共に、Clは段々家庭の中での主導権を発動していく。A子の心の動きが全く分からなかったのが、少しずつ分かったり、Clにも共感できたりする。すると、以前のA子の言動が意味を持って理解できる。Clはやっと母親らしい気遣いもでき、A子のためにならないと思えば、手や口を出さずに我慢をしなければならない場面もあった。

5月から翌年の3月までの、A子の付き添いは大変な労力であった。しかし、「今まで親らしいことをしなかった償いと思えばやってあげられる」と辛抱強く耐えていた。また、この二人での登校がA子との心の繋がりを回復するのに役立っていた。

Clはもともとかなり知的にも高く、理解力もあり、母性的な感性も持っていたのであろう、回復も早かった。

Clの夫も、間接的ではあってもClを助けていた。養母の様に養父と一緒になってClを傷付ける事もなく、無言の内に労っていた模様である。

2　A子のもつ問題

A子は知的にも高く、感受性も豊かで、努力する子であった。小学校の低学年は、優等生であったらしい。その頃から、なんでも人より優れているように、祖父から要求され、それを満たしてきた。A子の自我は肥大して、プライドは高くなってしまった。祖父の愛情を得てそれに答えるべくA子も努力したが、小学校の高学年ともなると、万能ではないので、成績にもかげりが出始めた。人より劣っているのに耐えられないA子は、登校拒否となった。

初潮をみたあと、大人の女性になることを拒否したA子はやせ症となる。そこで、Clとの母子関係に注目されねばならないところであった。やせ細ったA子を見兼ねて入院させようとClが言い出した時には、気味が悪いくらいだった、という。祖父は反対したらしいが、父親の意見もいれてやっと医者に掛かる。食事などは、食べようと思えばよいのだから病気ではないという、祖父の理屈はいれられなかった。祖父も体が弱ってきて以前のように強権を発動させることは出来なくなっていたのかも知れない。

中学校へは気持ちをを入れ替えて通学すると、入って一学期はよかったが、成績は期待するほど回復せず、ついに再び欠席することになる。A子にとって、学校はよい成績を取らなければ意味のないところであった。友達もなく、楽しみもないから。

A子の友達はなく、あってもその子が去って行けば自分からは作ることができない。それだけ積極性に欠けていたから、常に受け身のA子は自分に近寄ってくれない同級生を前にして、なにもできないのである。これは、プライドの高さというよりは、消極的な性格がそうさせていたものと思われる。

中学校の登校拒否の内の半分は祖父の看病に費やされた。祖父が喜ぶからA子は大人も顔負けのねんごろな看病をしている。

3　養父と家族全体の問題

この家族の中で健康なのは、次女と長男である。この二人がいたため、面接の中でClがより

早く問題の所在に気付く事ができた。二人は友達も多く、暇さえあれば遊び、部活動に精を出す。長男は事故の後、腕を骨折したにも関わらずいろいろな理由をつけて学校へ行こうとした。「休ませるに骨が折れた」とClの夫は笑っていた。それが普通ではないか、と思うのに、A子も長女も友達がいないのは、自己主張できないから、人の言いなりにならなくてはならず、年長になって、言いなりになるのは嫌だと思うようになると、仲間の間へ入るのを止めてしまうのである。小学校の高学年になるとただ勉強ができるだけでは仲間の尊敬を集めることは難しくなる。それまで保ってきた学級内の社会的地位が下降してきたのに耐えられなくなったのであろう。

長女にとって、家の中の居場所は祖父のそばだけではなかったのか。思春期ともなると、大人になるために必要な親子の信頼関係が確立されていないために、情緒的な安定を欠き、登校して勉強するだけのエネルギーに乏しかったものと考えられる。

別れた夫に似ているという理由で母親から疎まれ、頼みとする祖父からは継父の悪口を聞かされた長女が家の中で、全員に当たり散らしているのもうなずけるものがある。A子のための治療が進むと母親が変わってきて、長女への対応がよくなったのか、長女も同じ職場へ少し定着できていた。

Clの夫は、「これが(Clのこと)あんまりお祖父さんの言いなりだもんで」と苦笑しながら語ったように、Clの問題の一部には気付いていても、口を出せない辛さがあったようである。Clはあてにできない人だと言っているが、それは養父に比べればの事であって、面接の過程では、Clも結構あてにしていた。A子を大阪まで送っていく時も、長距離運転には自信のないClに代わって運転してくれたり、A子の付き添いで、学校へ行っている間に、店番をしたり配達をしたり黙ってやってくれている。

養父の持つ問題は大きい。学歴もあり、中学生の孫の勉強はみんなみてくれたという博学な人であるが、自己中心的で孫に対して親の悪口を散々聞かせるというのは、どうしても納得のいかないところである。〝親の出来が悪いから頑張れ〟と言えば孫がしっかりすると思ったのであろうか。あまり教育のある人のすることではないと思われてならない。

社会的には尊敬に値する人のようである。〝人助けが趣味のような人でした〟とClは言うが、後にあれは何だったのか、人のためになっていなかったのか、単に養父の自己満足にすぎなかったのか、と疑問に思われてくる。いずれにしても、長女とA子の登校拒否はこの養父の存在があったことによっていることは否めない。

4　母親面接について

一般に教育相談室などでよく行なわれる母親面接の方法は、子供の症状の治療を目的として、子供に最も影響を与える者としての母親に面接することで、治療に助力しようとする意図で行なわれているようである。この場合、母親のパーソナリティが比較的にノーマルである場合はまず問題は少ない。面接もいわゆる副治療者によってもスムーズに行なわれて終了することが多い。しかし、たまたま母親のパーソナリティに問題があり、未熟さやその他の病理性が相当強度である場合、母親担当の副治療者は、場合によっては、子供担当の主治療者よりもむしろ困難な面接を経験する事が多くなる。しかし、登校拒否の教育相談となると、保護者との相談回数が、本人との相談回数を上回っている。そして、そのほとんどが母親との面接である。母子関係の重要性は、今更言うまでもない事であるが、小さい子供ほど母親の影響を受けやすく、母親の面接は、本人との面接と同等か、それ以上に重要となる。また、登校拒否の子供は、相談に来ないことが多いので、結果的に母親のみの面接になることがしばしば生ずる。

こうした場合、母親は、自分の悩みではなく、「子供の状態について困っている」と言う事で相談に来るので、どうしても指導・助言を求める傾向が強い。ここに、母親面接独特の難しさがあると思われる。

母親面接は、つぎの3つの場合に分けられる。

①　母親が人の話を聞くことができる場合。

②　母親が人に話を聞いてもらうことで人の

話を聞くことができる場合。

③ 母親が人に話を聞いてもらうだけでは困難で、母親自身の中の受容性（母性性）を開発する必要がある場合。

母親が①の状態にある場合には、助言が有効であろう。子供の状態が軽ければ、1～数回の面接で済むこともある。②の場合は、母親自身がなんらかの理由で一時的に、自分の悩みを持っていたり、子供の事で困ってしまい、子供を受け止める事ができない状態にあるので、助言はむしろ母親を苦しい状態に追い込むことになり、相談が中断する事もある。いくら「正しい」助言をしても、状態が悪化しては何にもならない。この場合は、「受容」と「共感的理解」を中心にしたカウンセリングが有効である。

母親側の受容性（母性）が非常に未開発であるために、子供が相当な退行状態を示す場合がある。③の場合がこれに当たるが、このようなときには、じっくりと腰をすえて、母親と共に母親自身の内なる母性を開発する事が必要となる。

ここに報告した事例は、③の場合に当たる。じっくりと母親面接を続けて、母親の母性を開発したものである。

V 要 約

三女の登校拒否に悩むClは自分自身孤児で、養父母に育てられた。最初の夫との間にできた長女もかつて登校拒否をして、中学校をやっと卒業させてもらっている。三女は小学校の5年生から登校拒否があり、その間施設へ入所して治療をしたり、やせ症になって病院に入院したりするが、欠席のまま中学校へ進む。中学校では1年の1学期のみ登校しまた欠席が始まる。治療は、2年の2学期の11月から中学校の卒業まで続けられた。

問題は、母親（Cl）の母性の未発達にあった。孤児であったClを育ててくれた養父が、絶大な権力を振るい、Clは何ごとも養父の言うままに行動し、かつ常に叱られ、けなされて成長した。自分の子供の教育もできない母親であると思いこまされ、夫と共に親らしい役割を果たせない状態であった。三女はその養父に可愛がられて、Clの悪口を聞かされてきたので、思春期を迎えて母親であるClの状態を見るにつけ、その生き方を否定してきた。やせ症はその状態で起きたものであった。その養父が死んで、半年後からこの治療が行なわれた。

Clは養父の指図に口を挟むことができなかったので、自分の気持ちに自分で気付くことがなかった。面接が進む中で、やがて、このClは自分で考え、その気持ちを治療者に語ることで、内なる母性性を取り戻し、家の中でも母親としての役割を十分果たすことができるようになってきた。それと共に、三女も学校の協力を得て、授業後の学校へ行き、担任の指導を受けたり、テストを受けたりできるようになり、ついには希望の高校の入試を受けられるまでになった。母親の成長と共に、三女も登校拒否から立ち直ったのである。

参 考 文 献

梅垣　弘　登校拒否の子どもたち　学事出版社　1984

菅　佐和子　思春期女性の心理療法　創元社　1988

田畑洋子　思春期登校拒否の治療過程
－母親面接を通して－
名古屋女子大学　紀要　34号　1988

田畑洋子　心理療法過程における母子関係の変化(1)
－幼児期の事例－
名古屋女子大学　紀要　37号　1991

野村法子　子どものことで不安をかかえるある母親との面接　東京大学教育学部　心理教育相談室　紀要　8号　1985

生田純子　思春期登校拒否の治療事例
－長い眠りの時を越えて－
東海女子大学　紀要　9号　1990

名古屋市教育センター　教育相談に関する研究
－登校拒否中学生をめぐる問題－
研究報告　5704　1982

氏原他　学校カウンセリング　ミネルヴァ書房　1991